

# 世代を紡ぐ 道しるべ

⑤

中島敏

〜元海上保安官のひしぎと

ある日、バン格拉デシユの新聞が、日本の全国紙を引用し「東京で10分停電、首都大混乱」と題した記事を写真入りで大きく掲載しました。これを見た現地の人々が、「ここバン格拉デシユでは、停電は日常茶飯事。なぜこんなことが大きく新聞に取り上げられるのか?」と問われ、「えっ?」と答えに窮しました。(チコちゃんに叱られますすよね

## 井の中の蛙、井の中の素晴らしきを知る

……)

電気は消えないのが当たり前との日本の常識は世界の非常識なのです。

日本はなぜ、電力をはじめとするさまざまな社会基盤が整い、いわゆる先進国と言われているのか。日本人同様、ベンガル人も勤勉

さは変わらない、またエリート層は国際的センスに富んでおり能力も高い。なのになぜ、発展の速度が異なるのか、素朴な疑問が湧いてきました。

時代をさかのぼると、その要因の1つに日本の地政学上の優位性があるので

ていたお陰で、大陸文化を我が国独自のものとして、じっくり熟成する時間も持てました。

米国のトランプ前大統領が、2018年9月の国連総会演説で「国境を守る」とよってのみ繁栄のため

点は注目に値します。

開発途上国にとり、陸続きの国境を有しているが故に発生するさまざまなトラブルは、国の形を変える事態にも直結します。そのため、密輸、密航といった陸上を経由しての犯罪や難民、侵略、紛争、戦争とい

はあります。国境の大部分を他国と陸伝いに接していることから、日本では想定できない問題を抱え、これらに多額の予算とエネルギーを投入しなければなりません。ロヒンギャ難民はその一例です。

バン格拉デシユでの2年間は、途上国の置かれている厳しい現実を目の当たりにする機

は、と気づきました。特に、大陸からの微妙な距離感と四面を海に囲まれている点(近年はこの距離感が負の要因ともなっています

る」と訴え、メキシコからの密航、密入国を防ぐことを目的として壁を築く権利を主張しました。米国第一主義を前提とした演説でもあり、違和感は拭いきれませんが、大国たる米国の大統領でさえ、陸続きの国境を大きな脅威と捉えていた

った事態に対処するため多額の予算を投入せざるを得ず、結果、社会基盤整備など国民目線でやるべき事柄の優先度が下がり、国の発展が遅延するといった負のスパイラルに陥りやすい傾向となります。

バン格拉デシユも例外で(第44代海上保安庁長官) 井つづく